

時間を論じる視角としての空間

——モーリス・アルヴァックスの集合的記憶論を中心に——

関西大学 金瑛

1 目的

本報告では、モーリス・アルヴァックスの集合的記憶論における時間論を中心に取り上げ、過去という時間性が問題となる記憶現象における時間のあり方について検討する。この検討を通じて提示するのは、時間意識は空間性の反映として説明できるという仮説であり、時間を論じる視角としての空間の重要性である。

2 内容

アルヴァックスは『記憶の社会的枠組み』において、記憶作用を規定する枠組みとして言語活動・時間・空間を挙げている (Halbwachs [1925]1994=2018)。『記憶の社会的枠組み』においては、主に言語活動が中心的に論じられており、時間・空間は主題とはなっていない。だが、晩年の『集合的記憶』においては、時間と空間にそれぞれ一章が割かれており、記憶と時間・空間との密接な関係性が主題化されている。そして、集合的記憶は「連続した思考の流れ」 (Halbwachs [1950]1997: 131=1989: 88) として定義され、記憶現象においては過去と現在の連続性という時間感覚が要となるという認識が提示されている。

ここで重要になるのは、アルヴァックスがこうした時間感覚を一種の幻想と捉え、この幻想を成立させる契機として空間を重視している点である。「空間のイメージだけが、その安定性に依拠して、時を経ても何も変わらないという幻想と、現在の中に過去を見出すことができるという幻想を、われわれに与えてくれる」 (Halbwachs [1950]1997: 236=1989: 207) というアルヴァックスの指摘は、彼が「集合的時間」と呼ぶ時間表象が空間のあり方と密接に関わるものである点を示唆している。アルヴァックスは法・宗教・経済といった象徴によって構造化された空間や、「学者や画家の空間」、音楽空間などの多様な空間について論じているが、これらの空間はそこで人々が感じる時間意識と密接に関わったものである点が強調されている。そこで焦点化されているのは、「生きられる時間」としての過去と現在との連続性の感覚が、空間のあり方によって担保・解体されるという両者の対応関係である。

本報告では、こうしたアルヴァックスの議論が時間を論じる視角としての空間の重要性を指摘するものであると解釈し、Hirsch (2016) や Namer (2000) といった先行研究を踏まえながら、理論的・実証的に時間を論じるうえでアルヴァックスの理論が有する可能性を提示する。

文献 (その他の文献は報告時に提示します)

Halbwachs, Maurice, [1925]1994, *Les cadres sociaux de la mémoire*, Paris: Albin Michel. (=2018, 鈴木智之訳『記憶の社会的枠組み』青弓社.)

——, [1950]1997, *La mémoire collective*, Paris: Albin Michel. (=1989, 小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社.)

Hirsch, Thomas, 2016, *Le temps des sociétés : D'Emile Durkheim à Marc Bloch*, Paris: Éditions EHESS. Namer, Gérard, 2000, *Halbwachs et la mémoire sociale*, Paris: L'Harmattan.